

「ああ、もうだめだ」



まちを飲み込む津波を目の当たりにし、ぼう然とする避難者

15:30~ 海面の異様な変化 まちの盾越える

「ほれ！ 来たぞ！」
大きな声が飛び交い、避難者が一斉に海を指差しました。大尻方面で、波が岩にぶつかり大きなしぶきを上げているのが見えたのです。
「何でえ、ありゃあ！」
正面に目をやると、むくつと海面全体が盛り上がっていました。単に大きい波とは明

らかに違う異様な変化。これが津波のはじまりでした。湾口防波堤を越えて押し寄せてくる津波。海の端から端まで全体が大きな白い壁となりました。海岸に逃げ場はなし。なす術もなし。漁港や漁船、北日本造船などの工場、大型作業車、自家用車などが、あつという間に波に飲み込まれていきました。陸地や建物にぶつかり、大

15:35~ 間髪入れずに2波 想像を超える猛威

波は引かず、防潮堤あたりまで上がったままの海面。第2波は、その上から間髪入れずに襲い掛かってきました。電柱や防潮林をなぎ倒し、すでに浸水した工場や民家の上に容赦なく覆いかぶさる津波。ドバーン！ メキメキ！ 恐ろしい衝突音と破壊音は金刀比羅神社まで聞こえてき

15:53~ 引き波で海底がさらさら3波が襲う

第2波の後、海は再び異様な変化を見せました。信じられないほど波が引き、海底がむき出しになったのです。川や陸地からもいったん波が引き、変わり果てたまちが

きなしぶきを上げた後も津波の勢いは収まりません。地面を削り取り、どす黒くにごった波は、ものすごい勢いで防潮堤に激突しました。
高さ7m、延長1305mある久慈湊地区の防潮堤。過去の津波による被害を教訓とし、整備した「まちの盾」も津波は乗り越えてしまいました。防潮堤付近の民家などは、あつという間に浸水。高見台からは国道まで水が流れ込んでいく様子がよく見えました。
「ああ、もうだめだ。」
「こんなの見たことねえ。」
絶望の悲鳴。避難者のふるえた声が響きました。

わたしは想像を超える津波の猛威を目の当たりにし、カメラを持つ手は震え、寒さなのか恐怖なのか、もう訳が分からなくなっていました。
あたりを見回すと、膝を抱えてうずくまる人、ぼうぜんとして立ち尽くす人、どうしようもできず、暮らしてきたまちが津波に飲み込まれる様子を見つめるしかない人。怒りや混乱というよりも、あきらめのような雰囲気漂っていました。



1 / 15:30ころ。むくつと盛り上がる海面
2 / 15:32ころ。海面の端から端まで高く盛り上がり、白い壁のようになって襲い掛かる津波
3 / 15:33ころ。勢いよく陸地にぶつかる津波。7mの防潮堤のはるか上



4 / 15:34ころ。防潮堤を越え、木々をなぎ倒し、フェンスを折り曲げて民家に襲い掛かる津波。この背後には第2波が
5 / 15:36ころ。第2波襲来。海面は上昇し、見えるはずの防潮堤は見えない
6 / 16:09ころ。引き波で海底があらわに



16:20~ 遡上し久慈川増水 止まらない震え

姿を現しました。浸水した家、傾いた家、もとの形や場所が分からなくなるほど壊れたり、流された家もありました。
それでも津波は収まりません。引いた波を倍にして押し返すように、第3波がまちを襲いました。何度も繰り返し襲う津波。命を育み、恵みを与えてくれる普段の海の優しさはみじんも感じられません。この日の海は、ただただ、無情でした。

第3波後、同僚から「市役所は無事」との電話連絡。海の様子を見計らい、わたしは市役所に戻ることにしました。浸水し、泥で埋め尽くされた国道を走り、恵愛病院へ行



浸水し、泥にまみれた国道395号



津波が遡上し、決壊寸前となった久慈川

ってみると、がれきに囲まれながらも自家用車は何とか無事。まだ震える手でハンドルを握り、市役所に急ぎました。途中、川崎大橋から下をのぞくと、津波が遡上し堤防ぎりぎりまで増水した久慈川の姿がありました。にぶく不気味に光って見える水面。もし川が決壊していたら市役所も市街地も無事では済まなかったでしょう。想像すると恐ろしくてたまりませんでした。
最後まで止まらない手の震え。カメラバッグを腕で抱え、市役所の執務室に戻りました。今振り返ると、このときは津波から逃れることで精一杯で、考えてもいませんでした。他の沿岸部の惨状を。